

<「知るっば！久留米」 令和3年3月4日（木） 12：30～放送分>

高島野十郎 ～第1回～ 「高島野十郎とは」

<ゲスト：久留米市美術館 学芸員 中山景子さん>

坂本 MC（以下「坂本」）

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今月は、『高島野十郎』をテーマに彼の生涯とその作品についてお送りしていきます。

ゲストはこのかたです。

ゲスト：中山景子さん(以下「中山」)

久留米市美術館で学芸員をしております中山です。

よろしくお願いします。

坂本 第1回目の本日は、『高島野十郎とは』をテーマにお話をうかがいたいと思います。

まず、高島野十郎さんは、久留米を代表する画家のひとりですが、

ご存じない方もいらっしゃるかと思いますので、

本日は、高島野十郎さんについてご紹介いただきたいと思います。

中山 はい。高島野十郎は、今では全国的に有名となり、幅広い世代の方から人気のある画家ですが、生前は、一般にはその名が知られることはありませんでした。

坂本 絵描きさんにはよくある話で、「生きていた頃は無名の画家だった」ということですね。

中山 野十郎が画家として活動したのは、大正から昭和にかけての時代ですが、

その頃の画家たちの多くは、どこかの絵画団体に所属して、

公募展に作品を発表して賞を受賞し、徐々に有名になっていくというコースを目指していました。

坂本 何々会とか何々展には所属しなかったということですね。

中山 そうですね。野十郎は、そうした画壇、つまり画家たちの社会とは一線を引いていました。

ひとりで制作を続け、描きためた作品は「数年に1度のささやかな個展のみで発表する」という

スタイルを貫いたので、当時のマスコミに取り上げられることもほとんどなく、

ごく限られた人たちにしか知られていませんでした。

坂本 いかにも一匹狼の画家だったという感じですね。

野十郎という名も変わっていますしね。

中山 そうですね。野十郎は、生涯独身で、人里離れた自然豊かな場所にアトリエを構え、制作に励む日々を送りました。
そうした生き方と、他の画家にはない作風から、「孤高の画家」と紹介されることも多いです。
また、野十郎という名は、野垂れ死ぬことを願って、のちに自ら付けた名と言われています。
人知れず死ぬことを望む…。
野十郎という名にも、孤独を愛する生き方が表れていると思います。

坂本 孤独を愛した画家ですか。世間で有名になることを望んでいなかったのですね。
では、いつ頃から、高島野十郎という名が知られるようになったのでしょうか？

中山 野十郎は、明治23年に久留米で生まれ、昭和50年に千葉県柏市で亡くなりました。
亡くなって5年後の昭和55(1980)年に、現在の福岡県立美術館で開催された
「近代洋画と福岡県」という展覧会で、野十郎の作品が1点出品されたことが、
注目されるきっかけとなりました。

坂本 今から40年くらい前の話ですね。
福岡の美術館で初めて紹介された野十郎の作品は、どんな作品だったのでしょうか？

中山 「すいれんの池」というタイトルで、野十郎の油彩画の中でも最大の作品で、
もともとは久留米の企業のクラブハウスの壁に飾られていました。
福岡県立美術館の当時の学芸員が、展覧会の準備のために、福岡出身の画家たちの作品を
調査していた時に、野十郎の「すいれんの池」との出会いがあったのです。
「すいれんの池」から目が離せなくなった学芸員が、高島野十郎とはいったいどんな画家なんだと、
調査を開始しました。
ここから野十郎の研究がスタートしました。

坂本 当時の学芸員さんのワクワクが目に浮かぶようですね。
そして徐々に、野十郎の研究が進んでいった？

中山 野十郎の散逸した作品が集められ、野十郎単独の回顧展が開催されるようになって、
徐々に一般にも注目されるようになりました。
調査で新たに発見された作品を加えながら、全国各地で回顧展が開催されるようになると、
テレビでも特集されて、「孤高の画家・高島野十郎」の名が全国的に知られるようになりました。

坂本 久留米でも、過去に何度か野十郎の回顧展が開催されていますよね？

中山 久留米では、昭和 63(1988)年に、久留米岩田屋で開催された「高島野十郎展」が、初めての野十郎展でした。
そして、平成 23(2011)年には、石橋美術館で「高島野十郎 里帰り展」が開催され、今、久留米市美術館で開催中の展覧会が、久留米では3回目の野十郎展です。

坂本 私は、1回目も2回目もよく覚えています。
いずれもお客さんが多かった印象があります。
故郷の久留米の他にも、野十郎のファンは多いのですね。

中山 今回の久留米市美術館の野十郎展には、市外からも、野十郎展を楽しみにしていたと来られる方が多くいらっしゃっています。
また、野十郎の絵は、小説家や作曲家などのアーティストに、創作のインスピレーションを与える力があるようです。
近年、野十郎の作品から着想を得た小説や曲が発表されたりしています。

坂本 例えばどんな方がいらっしゃいますか？

中山 最近、高木日向子さんという若い作曲家さんがいらっしゃるのですが、その方が野十郎の「蠟燭(ろうそく)」という絵を見て、そこから原始的な何かが産まれる瞬間をイメージされたそうです。
その「瞬間」を意味するフランス語で「ランスタン」という曲を作曲されまして、その曲が、今年のジュネーブ国際音楽コンクール作曲部門で見事1位を獲得されました。

坂本 それは、1度聞いてみたいですね。

中山 オオボエソロのちょっと不思議な感じのする現代音楽なんですけど、その曲は展覧会会場でも流しておりますので、ぜひ聞いてみてください。

坂本 久留米市美術館の中山さん、興味深いお話をありがとうございました。
久留米市美術館は、生誕 130 年を記念して「高島野十郎展」を開催しています。
久留米市美術館の開館時間は、10時から17時までで、毎週月曜日が休館日です。
次回から、高島野十郎の人生と作品を年代ごとに、より詳しくお話をうかがっていきます。
おたのしみに。